

## ユアにおける分業と機械

——〈資本の生産力〉認識の形成 (2)——

植村邦彦

### はじめに

ユア (Andrew Ure, 1778—1857) という名が想起させる人間像は、おそらくあまり好ましいものではない。エンゲルスによって「根っからのブルジョア」, 「ブルジョアジーの選ばれた下僕」<sup>(1)</sup> とよばれ、またマルクスによって好んで機械制工場の「ピンドロス [古代ギリシアの頌歌詩人]」<sup>(2)</sup> とよばれている彼については、工場主＝産業資本家の立場に立つ工場賛美者という評価は、現在では一般に承認されていると見ていい<sup>(3)</sup>。

しかし、我々にとって重要なのは、ユアがこのような産業資本家（正確にはむしろ、機能しつつある産業資本家としての工場管理者<sup>(4)</sup>）のイデオログたることによって、彼の著作が「工場精神の古典的な表現である」(K. I. S. 460) ということ、すなわちその中で、彼が工場における相対的剰余価値生産の方法を、したがって資本の生産力を、明確にそのようなものとして認識し、表現しているということである。この点において、彼はバベジ (Charles Babbage, 1792—1871) と並んで、マルクスにたいしてアダム・スミスの分業論の批判的理解に際しての大きな手がかりを与えるとともに、また1860年代における相対的剰余価値論の本格的展開の際に、改めて重要な契機を提供することになるからである。

バベジにおける分業論と機械論、彼の〈資本の生産力〉認識については、我々はすでに前稿で検討を加えた<sup>(5)</sup>。ひき続いてユアにおける工場制度論とそこにおける〈資本の生産力〉認識を、スミスならびにバベジとの対比において検討することが、本稿の課題である<sup>(6)</sup>。

## 1. ユアの時代と問題意識

ユアの経済学上の主著『マニファクチュアの哲学』が出版されたのは1835年、これは、1832年に初版が現れたバベジの主著『機械とマニファクチュアの経済について<sup>7)</sup>』の第4版が出版された年でもある。ここから、イギリスの経済思想史上、機械・マニファクチュア論に関して、グラスゴウ生まれのスコットランド人ユアとデヴォンシャ生まれのイングランド人バベジとは、ライヴァルの同時代人とみてさしつかえない。

しかし、共に1830年代というイギリス産業革命の完成期、確立した産業資本による相対的剰余価値生産の追求の本格化の時期に現れながらも、両者の主著の間には、一つの微妙な時期的違いがある。すなわち、バベジの書が1833年工場法の成立以前に書かれたものであるのに対して、ユアの書はその成立後のものだという点である。「初期工場法の原基形態をなす」「最初の本格的工場法<sup>8)</sup>」である1833年工場法の影は、彼の書の全体をおおっている。言い換えれば、彼の書は全編を通じて、この工場法と（それに対抗する形で）その背後にあった10時間労働運動とを最大の批判対象とするものであった。

ユアの書の問題意識は次のことにある。

彼は眼前の世界の状況を次のようにとらえる。「諸国民はついに戦争が常に損なゲームであることを確信し、彼らの剣や小銃を工場の用具に転じ、そして今や、血を流しはしないが、しかし依然として恐るべき貿易という闘争において互いに争っている。彼らは、もはや遠くの野で闘うために軍隊を送りはしないが、彼らのかつての武装した敵の織物を彼らの前から駆逐し、外国市場を手に入れるために、織物を送り出している。」(p. vii)

このような「新しい交戦制度」(ibid.)においてイギリスが現に保持している優位を維持すること、そのためにマニファクチュアの諸原理を厳密に分析し、簡単な仕方ですれらを詳説し、それによって工場の改良のための啓蒙を行なうこと、これがユアの問題意識であり、この書の課題であった。

他の諸国民から卓越するイギリスの「国富」の豊かさを工場制度の成立と結びつけ、さらにより高い生産力を実現するためにマニファクチュアの諸原理を解明する、という問題意識は、その限りではバベジとも共通するものであ

り、総じて1830年代の産業資本家とその代弁者の一般的共通認識であった<sup>(9)</sup>。その点で、バベジの書もユアの書も、相対的剰余価値生産の方法の追求といういわば時代の要請に答えようとしたものにほかならず、またそのようなものとして迎えられたのである。

しかし、両者の問題視角は微妙に異なる。バベジにとっての問題が、現在の国富の増大をもたらした生産様式の理論的な分析にあり、彼の批判対象はマニファクチュアの諸原理についての一般的「無知」にあったのに対し、ユアにとっての批判対象は、同じく「無知」ではあるが、工場法という姿、あるいは「社会主義者、チャーティスト、ウルトラ・トーリーの奇妙な結合<sup>(10)</sup>」たる10時間運動という姿をとって現れた干渉的・攻撃的な「無知」であったが故に、彼にとって、工場制度の諸原理の解明は、同時にその賞揚、「工場主の弁護<sup>(11)</sup>」とならざるをえなかったのである。

こうして、実際、この書は「繊維工業を他の土着の諸産業から賞揚し、当時工場制度に対して一般的に浴びせられていた、〔労働者の〕酷使という非難からそれを防衛<sup>(12)</sup>」しようとするものと評価されたのである。

『マニファクチュアの哲学』は4部から成り、第1部が理論的総説としての「マニファクチュアの一般的諸原理」、残りの3部は各論として各々工場制度の「科学的経済」（繊維工場における生産の技術的構造）、「道徳的経済」（労働諸条件とそれに関する偏見・立法等）、「商業的経済」（自由貿易の主張と保護主義批判）を論じたものである<sup>(13)</sup>。

このうち、工場法および10時間運動に対する批判を主題的に展開しているのは、第3部「工場制度の道徳的経済」であり、そこでの主論点は、工場法がそもその前提としていた工場認識（労働過重、児童の虐待、労働者の賃金低下、等々）を「偏見」（p.277）、「偽りの非難」（p.300）として退け、家内職工等と比べての工場労働の「快適さと健康さ」（p.404）を賞揚すること、そして「自由への干渉」（p.297）と国際競争力の低下を根拠として労働時間の法的制限への反対論を展開することにあった。この点で、ユアは、工場法に対する『マンチェスター主義』に発展していく自由主義的色彩の濃い反対論<sup>(14)</sup>者のうちに数えることができるであろう。

この第3部での工場法批判の際、「偏見」に対してユアが対置している工場像は、第1部で基礎づけられたものであるが、このことから、また我々の本来の問題関心である、ユアにおける〈資本の生産力〉認識を探るためにも、我々は第1部における彼の工場制度概念を検討しなければならない。

## 2. マニユファクチュアと工場制度

ユアの書は、バベジの書とほぼ時を同じくして現れたものであるにもかかわらず、そこで彼が認識対象としている「マニユファクチュア」という用語の内容自体が、バベジとは対照的に異なっている。

「マニユファクチュアという言葉は、言語の変遷において、その本来の意味とは反対のものを意味するようになった言葉である。というのは、それは今では人間の手の助けをほとんど、あるいは全く借りずに、機械によって作られるすべての広範な技術の産物を指すからである。だから最も完全なマニユファクチュアとは、完全に人間の手の労働なしにすまずものである。」(p.1. 強調は原文)

ここは重要である。スミスもバベジも共に、「マニユファクチュア」という用語で何よりもまず、一定の熟練をもつ職人間の分業的協業という労働様式を表象していた。それ故にこそ、そのドイツ語表現である〈Manufaktur〉は、そのような作業場制手工業を表わす歴史的範疇になりえたのである<sup>(15)</sup>。それに対して、同じ言葉でユアが考えているものは、機械制生産<sup>(16)</sup>、彼自身の言葉で言い換えれば、自動機械制工業 (automatic industry) である。したがって、彼の認識対象たるマニユファクチュアを特徴付ける定在様式は、「工場制度 (factory system)」にほかならない。

ここで「工場」ないし「工場制度」という言葉の内容が問題となる。「工場制度」という表現は、1806年の羊毛工業に関する議会委員会報告のなかに現れるが、その時点では「機械という概念は必ずしもそれに結びついていなかった<sup>(17)</sup>」。それに対し、1830年代には「議会の討論や、新聞の論評や、一般のおしやべりで、かなり前から流布している<sup>(18)</sup>」表現となっており、その場合には機械を使用する作業場を指すのが一般的であった<sup>(19)</sup>。しかしなお、工場の

定義、したがってその内容把握は一義的ではなく、それ故、例えばバベジにおけるように、大工場とマニュファクチュアの作業場とを原理的に区別しないばかりか、大工業を「マニュファクチュアの立場からのみ理解」(K. I. S. 370)する見解も、一般に受け入れられる余地が十分あったのである。

このように「何人かの著作家〔バベジと読め〕は、実際、工場という名で、多数の人々が共通の目的のために協働 (co-operate) しているすべての広い施設を理解してきた」(p. 13) のに対して、ユアは工場により限定された定義を与える。「工場という語は、技術学では、一中心動力によって間断なく運転されている生産的機械の一体系を行き届いた技能をもって世話している成人および若年の労働者の多くの等級の結合された作用を示す。……この名は厳密な意味では、共通の物の生産のために間断なく協力して働いており、そのすべてが自己規制的一動力に服属しているところの様々な機械的器官と知的器官とで構成された、一つの巨大な自動機械 (automaton) の概念を意味する。」(ibid.)

この引用文の前段では生きた労働の編成に力点があるのに対して、後段では生きた労働と死んだ労働との総体の分割＝結合が強調されている点で力点の置き方は異なるが<sup>(20)</sup>、一貫してここでは、中心動力によって動かされる機械体系への労働編成の従属が語られている。つまり、スミスやバベジが描いてみせたような労働者の労働能力に基礎を置いた主体的分業はここでは姿を消しているのであって、労働編成の原理は決定的に転換しているのである。「工場制度の原理は、したがって手の熟練の代わりに機械科学を置き、そして職人間の分業ないし労働の等級付けの代わりに、一つの過程のその本質的諸要素への分割を置くことである。」(p. 20)

このように、工場制度における労働編成を、「熟練の諸等級への労働の分割というスコラ的ドグマ」(p. 23) から解放され、機械科学に基づく技術的な工程分割に規定された、自動機械の「知的器官」の編成としてみるというユアの認識が、スミスやバベジの分業認識とは質的に転換したものであるとともに、『資本論』第1部第13章におけるマルクスの大工業の特徴付け (K. I. S. 407, 510) の原型をなすものであることは、容易に理解できる。

一言でいえば、ここでユアは、マニュファクチュア的分業から機械制工業へ

の原理的な転換を明確につかんでいるのである。のみならず、この転換が歴史的段階的發展であると彼が認識していたことは、彼が、スミスの時代には「自動機械はほとんど知られていなかった」(p. 19)として、スミスが分業をマニファクチュアにおける改良＝生産力増大の第一原理としたことを、スミスの歴史的制約性であるとおさえていることからわかる。

このように、1830年代時点での工場内部の労働編成は、スミスが提示した分業とは歴史的・原理的に異なるということを明示したこと、この点が、ユアの書がそれをはじめて読んだマルクスに対して与えた最大の衝撃であったことは、ほぼ間違いない。そのことは、マルクスが、スミスの分業像の歴史性を明らかにした点をユアの功績としてくり返し強調していることからわかる<sup>(21)</sup>。

そして、ユアのこの論点からマルクスが受け取った最大のものこそ、「分業は、決して大多数の、また極めて多種多様な社会状態に共通する一般的範疇ではなく、全く規定された、歴史的な、資本の一定の歴史的発展段階に対応する生産様式である」(Ms. 61—63, S. 274)という、「資本の一つの特殊な生産力」(ibid., S. 242)としての分業認識であった。このような認識を基礎にしてはじめて、相対的剰余価値論は成立しえたのである。

### 3. 工場における分業の転換

以上のように、ユアは、工場を一中心動力に服属し、人間をもその一器官とする「一つの巨大な自動機械」と定義することによって、それが「旧い分業の原理」(p. 21)と対立し、それを変革するものであることを明らかにしようとするのであるが、それは逆に言えば、工場概念把握との対比において、マニファクチュア的分業が概念的に把握されているということを意味する。

彼は、「旧い分業の原理」を次の2点においてとらえている。

第1に、ユアはこの分業を労働の熟練度の相違に基づく「等級制 (graduation system)」(p. 21) ととらえ、そこにおける「能力の束縛、精神の狭小化、肉体の發育不全」(p. 22) という否定面を明確に認識した。この等級制は「ある人をピンの頭作りに、他の人をその先端の成形にと、生涯の間、最も退屈で精神をすり減らす不統一性をもって、固定させたからである」(ibid.)。他方、

スミスやバベジが強調した分業の生産力的効果、労働コスト低減効果については、彼は一言も言及していない。つまり彼は、分業を労働の生産力としても資本の生産力としても認定することなく、専らアダム・ファergusン流の分業＝疎外観のみを再生産するのである<sup>(22)</sup>。

第2に、彼は分業にたずさわる熟練職人の労働を「不規則」なものとして、「工場の規律」に対置した。「人間の本性の弱さによって、労働者がより熟練するほど、彼はよりわがままで手に負えなくなる傾向がある。そしてもちろん、機械的体系の一構成部分にはより適合しなくなる傾向にある」(p. 20)のだが、マニュファクチュア的分業においては、まさに「多少とも熟練した労働が、通常、生産の最も広範な要素であった」(ibid.)からである。この「わがままさ」は、しかしながら、労働過程における労働主体の相対的自律性・自立性、すなわち資本による労働者の実質的包摂の度合の低さの、資本家の目から見た表象にほかならない。

熟練に基礎をおいた労働の等級制としての分業のもつこれらつの否定面(第1は労働者にとっての、第2は資本家にとっての)の把握は、同じく分業を熟練の等級制と見ながら、資本の生産力の主要契機としてのその積極面のみを強調したバベジには見られないものであり、この点でユアは、「マニュファクチュアの特有の性格を……バベジのような同時代の学者よりもより鋭く感知している」(K. I. S. 370)とすることができるのである。

さて、ユアは工場制度の成立をこの「旧い分業の実践と完全に衝突する」(p. 22)ものとみなしたが、この衝突を必然化するものが、機械の導入による労働の質的転換、すなわち労働の不熟練化であることを、彼は明確につかんでいた。「等級制では、人は自分の手と目が一定の機械的手練に十分に熟練するまで、長期の徒弟修業をしなければならない。しかし、一過程をその構成要素に分解し、そして各部分を自動機械のうちに体化させる体系では、普通の注意力と能力とをもつ人が、短期の見習いの後に、上述の要素的部分のどれかをまかされるであろう。」(pp. 21—22)

この労働の不熟練化は、同時に労働の均等化(equalization)＝等級制の解体、仕事の転換(translation)＝固定性の解体、および仕事の多様化＝一面性

の解体をもたらす。これをユアは次のように賛美する。自動機械工場の労働者の「仕事は、よく規制された機構の働きを監視することからなるので、彼はそれを短期に習得しうる。そして彼が自分の担当のある機械から他の機械に移す時、彼は自分の仕事を多様にし、また彼と彼の同僚の労働から生ずるこの一般的結合について考えることによって、自分の視野を広げる。こうして、道徳的著作家によって正当にも分業に帰せられていた、かの能力の束縛、精神の狭小化、肉体の発育不全は、通常的环境では、勤労の均等な配分の下では、起こりえない。」(pp. 22—23) ただし、ユアは正当にも、このような仕事の転換が「雇主の判断で、必要に応じて」(p. 22)のみなされるものであり、したがって機械制工業は労働者の能力の多面的発展の前提でありうるにしても、資本の下ではなお十分条件たりえないことを、このついでのようにもらしている。

第2に、資本家的価値合理性の立場からすれば、労働の不熟練化とは労働コストの低下にほかならない。というより、労働コストの引き下げのためにこそ、労働の不熟練化が要請されるのである。熟練の等級制に基づく労働分割を労働コスト引き下げの第一原理とみなすバベジとは異なり、ユアは、機械の充用をこそ労働コスト引き下げの第一原理として、すなわち資本の生産力の主要契機として、前面に押し出す。「実際、人間労働を完全に不用にすること、あるいは男性の勤労に代えて女性や児童の勤労を、熟練職人に代えて普通の労働者の勤労を置くことによってそのコストを下げるのが、機械のあらゆる改良の不変の目的であり傾向である。」(p. 23)

第3に、資本と労働との対抗関係でみれば、機械の導入による労働の不熟練化とは、労働過程における労働主体の自律性がますます奪われ、機械による労働の規則性の強制を媒介として資本が労働をより強力に包摂していく過程にほかならない。このように、機械の導入は人間を「本性上、断続的で気まぐれな筋肉的尽力」(p. 15)から解放する反面で、「多種の不規則さに陥りやすい・い労働者」(p. 19)を不要にし、「手に負えない労働者」に「つねに従順を教え」(p. 368)るものであり、確実に「すべての不当な組合を打ち破る」(p. 40)資本家の武器であることを、ユアは明確に認識しており、いたる所でくり返し強調している。

こうして、ユアは正当にも、工場制度の歴史的成立を「適当な自動機構 (self-acting mechanism) の発明」(p.15) 自体にではなく、「新しい労働の体系」(p.14), 「工場の勤勉の必要性に適合した工場の規律」(p.15) の成立に、すなわち「装置の様々な部分を一つの協働体 (co-operative body) へと配分すること、各器官をそれ特有の微妙さと速さとで動かすこと、そしてとりわけ人間にその気まぐれな仕事の習慣を放棄させ、彼らを複雑な自動機械の一定の規則性と一致するように陶冶すること」(ibid.) のうちに、見たのである。

#### 4. 工場制度概念の現実的基盤

それでは、ユアに機械(自動機械体系)を資本の生産力の主要契機と認識させ、機械を労働編成の規定者と見る工場制度認識、すなわち機械制工業の概念把握を可能にしたのは、何であるのか。一言でいえば、それは、彼によって意識的になされた対象の限定である。

彼は、先に見たように「工場」を定義した際、「しかしそれは、そこにおいて機構が結合された一連続体をなしておらず、また一原動力に依存していないような組織を含まない」(p.13) という限定を付けていた。ここから、製鉄所、染色工場、ビール醸造所、蒸留酒製造所等 (ibid.) の主要な装置産業、ユアの言葉で言えば「化学的マニュファクチュア」(p.2) は、「工場」の概念からの排除を宣言されるのである。

したがって、ユアの言う「工場」に該当するのは、「力学的マニュファクチュア」(p.2) のうち、「蒸気機関ないし水車によって動かされて」(p.3) おり、一連の連続的工程を有する作業場、つまりこの時点では、まさに1833年工場法がその適用範囲と定めた繊維諸工場(綿・羊毛・亜麻・絹の紡績・織布工場)に限定されているのである<sup>(23)</sup>。

それらのうち、特にユアが重視し、考察の最も主要な対象とするのは、綿工業である。なぜなら「自動機械制工業の完成が見られるのは、綿工場 (cotton mill) においてである」(p.2) からである。

これまで見たことから明らかなように、ユアは工場の成立を、「自動機械の結合 (combinations of self-acting machines)」(p.14) ないし「自動機構

(automatic or self-acting mechanism)」(p. 9, 15) の成立を基礎とし、それに規定される新しい労働の体系の成立に見たのであったが、その機械の自動化の最先端に位置するものとして、綿工業を対象にすえているのである。ここで、彼の言う「自動機械」ないし「自動機構」の具体像を見ておく必要がある。

彼が「自動機械」という言葉で念頭においているのは、紡績工程における「自動ミュール (self-acting mule)」と織布工程における「力織機 (power-loom)」であるが<sup>(24)</sup>とりわけ、典型として表象しているのは、1825年にマンチェスターの機械製造業者シャープ・ロバーツ商会が特許を取得した自動ミュールである<sup>(25)</sup>。「鉄人 (iron-man)」とよばれたこの自動ミュールは、「これまでに考案された最も巧妙な、最も有益な機構の例の一つ<sup>(26)</sup>」であり、従来のミュール紡績機がなお成人熟練労働を必要としていたのに対し、これは紡績工の労働を「主軸台の看視と糸繫に限定<sup>(27)</sup>」することによって、「労働を機械に置き換えることを可能にし……『熟練の譲渡』をもたらすもの<sup>(28)</sup>」であって、「精紡完全自動化の技術的基礎<sup>(29)</sup>」を確立せしめるものであった。

この自動ミュールは、1834年12月の時点で「60以上の工場で運転されはじめ」(p. 368)、「1850年代に中・太番手の紡績業をほぼ完全に征服<sup>(30)</sup>」することになるが、熟練労働の排除、成人労働者そのものの駆逐の最も強力な手段となることによって、それは「勤労階級の間秩序を再建し、大ブリテンを技術の帝国と確証するよう定められた創造物」(p. 367)の役割を果たしたのである。

自動機械制工業の最先端に位置し、したがって熟練労働の排除＝労働コスト引き下げの最も強力な手段として作用することによって資本の生産力の最新・最高の形態を示しているこの自動ミュール工場こそ、ユアの工場概念の支柱をなすものであった。

しかしながら、ユアに機械制工業の本質把握をなさしめたこの対象の限定そのものが、逆に彼の工場概念の問題点となる。つまり、このように対象を繊維工業に限定することによって、彼は機械制工業の概念把握に成功したが、そのことによってかえって彼の工場制度概念、換言すれば大工業概念そのものが限

定を受けているということである。

たしかに繊維工業、とりわけ綿工業が「イギリス19世紀中葉の主導産業<sup>(30)</sup>」であり、「当時としては最も発展した工場<sup>(30)</sup>」を持つものであったにせよ、製鉄業<sup>(31)</sup>、ビール醸造業<sup>(32)</sup>、染色業 (Vgl. K. I. S. 404) 等の技術的・経済的な重要性をもつ諸部門を除外することで得られた工場概念は、その後の発展をも考える時、やはり問題を残すことになる。「ユアの工場概念のもつ整合性は、そのような分野〔製鉄業や化学工業〕の切りすての上につくられていた<sup>(35)</sup>」という指摘は、とりわけ1850年代におけるイギリス工業の「繊維産業主導型から鉄冶金・機械工業主導型への転換<sup>(34)</sup>」をあわせ考えるとき、重要である。しかし、ここでは問題を指摘するにとどめたい。

### 結びにかえて

ユアの工場制度論、〈資本の生産力〉認識の意義を明らかにするために、最後に改めてバベジとの比較を通して、両者の共通性と差異とを検証することにしてしよう。

まず共通性について。スミスにあっては、事実上資本の下に包摂されているものとしての分業が、方法的には「普遍的富裕<sup>(36)</sup>」をもたらす労働の生産力として一貫して把握され、資本の支配、資本と労働との対立という生産関係視点は後景に退いていたのに対し、バベジとユアにあっては、資本家的生産関係は自明の前提であり、分業も機械も資本の下での生産過程の契機であり、労働コストを節約し利潤を増大させるための、すなわち相対的剰余価値生産のための方法として、把握されている。ここに〈資本の生産力〉としての分業・機械認識が、明示的に形成されているのである。ただし両契機への力点のおき方の違いが、規定的な生産様式の把握における両者の差、および資本の特殊な生産諸様式の歴史性についての認識の有無の差、となってあらわれている、と言うことができる。

すなわち、バベジが工場における労働コスト引き下げの、したがって資本の相対的剰余価値生産の主要契機を分業に見たのに対して、ユアはそれを機械に見た。つまり、バベジがスミスと同様に、ただしスミスとは異なる意味におい

て、分業を経済学の第一原理にすえたのに対し、ユアは、彼の考える製造業の現段階（綿工業を典型とする）においては、機械こそが資本の主要な「特殊の生産力」（Ms. 61—63, S. 242）であることを示そうとしたのである。この資本の生産力の主要契機の把握において、両者は対照をなす。

さらに若干敷衍すれば、バベジにとって分業が資本の生産力の主要契機であるのは、すべての大工場・大施設において、それが相対的剰余価値生産の一般的・規定的方法であるから、別の言い方をすれば、分業が量的に支配的な方法であるからであった。それに対して、ユアにとっては、機械制生産が資本の生産力の主要契機であるのは、それが戦略的主導部門たる綿工業において規定的になりつつある方法だからであった。いわば、機械制工業は、マニユファクチュア的分業とは質的・段階的に区別される、これから支配的になるべき方法だったのである。

この〈資本の生産力〉の主要契機の把握の違いは、さらに重要な問題をはらんでいる。

バベジは、道具と機械とをもっぱら人間の労働を軽減する手段として、いわば歴史貫通的・技術的に考察し、他方、分業を労働コスト引き下げを実現する経済学的原理ととらえることによって、労働の生産力と資本の生産力とを別々の契機に振り分けた、とすることができる。そのことによって、彼は、社会的労働の生産力と資本の生産力との弁証法を見ない代わりに、両者の現実的矛盾からも形式的には免れえたのである。

それに対して、ユアは、分業を生産力として認めないことによって、機械を二重の規定性において把握せざるをえなくなる。すなわち、彼は、一方で機械の改良は「労働者を、彼の精神を消耗させ、彼の目を疲れさせる調整の微妙さや、あるいは彼の肉体を歪めたり疲れ果てさせたりする努力の苦痛な反復から救い出す傾向にあるのだから、博愛的である」（p. 8）と述べて「科学の人間性」（ibid.）を賞揚するとともに、他方では、労働の不熟練化による労働コストの引き下げが「機械のあらゆる改良の不変の目的」（p. 23）であり、だからまた機械の改良は、労働者の反抗に対する資本家の武器になる、と強調しなければならぬのである。

こうした矛盾は、ユアにおけるタテマエとホンネとの矛盾とも言えるが、いずれにしろ、これは資本家の生産様式そのものがもつ矛盾、すなわち、機械制工業のもつ技術的可能性とそれの現実の資本家の形態との矛盾、あるいは社会的労働の生産力とそれが受け取らざるをえない資本の生産力という形態規定との矛盾、のありのままの反映にすぎない。だから、「彼が資本の頭の無思想な矛盾をさらけだしているその素朴さ」(K. I. S. 460) 自体に意義がある、とも言っているのである。

こうしてユアは、工場法を批判するために機械制工業の賛美をもくろみながら、その資本家の形態の実態をも明るみに出すことで、社会的労働の生産力の資本の生産力への転化のはらむ矛盾を明示し、そのことによって、マルクスの生産諸力の弁証法の構築に際し、最大の批判的素材を提供しているのである<sup>(38)</sup>。

(註)

- (1) F. Engels, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*. MEW Bd. 2, S. 349, 389.
- (2) K. Marx, *Über Friedrich Lists Buch: "Das nationale System der politischen Ökonomie"*, EDI, Paris, 1975, p. 96; id., *Das Kapital* I. MEW Bd. 23, S. 441 (以下、引用の際は K. I. と略記); id., *Das Kapital* III. MEW Bd. 25, S. 400.
- (3) アシュトンも、「例の鼻もちならないユア博士の描写」を行きすぎと認めている。T. S. Ashton, *The Industrial Revolution 1760—1830*. Paperback ed. Oxford, 1968, p. 94. 中川敬一郎訳, 岩波文庫, 134頁。
- (4) 「多くの工場管理者 (mill-managers)……この実践的な人々が我が工場制度の魂をなす。」A. Ure, *The Philosophy of Manufactures, or An Exposition of the Scientific, Moral, and Commercial Economy of the Factory System of Great Britain*. London, 1835, p. 43. (以下、本文で引用の際は頁数のみ記す)
- (5) 拙稿「バベジにおける分業と機械——〈資本の生産力〉認識の形成(1)」、『一橋研究』第4巻第2号, 1979年9月。
- (6) ユアについての主題的研究としては、すでに、仲村政文「マルクス生産力論の源泉——A・ユアの所説について」, 鹿児島大学『経済学研究』第3号, 1968年6月, 同『分業と生産力の理論——史的唯物論と生産力』, 1979年, 第2章, があるが、仲村氏はスミスやマルクスとの対比においてバベジとユアとを一括して論じており、両者の対照性そのものは明確に把握されていない。しかし、両者の差異

- を明確にすることは、〈資本の生産力〉認識の考察においては重要である。なお、管理論の側面からの研究として、茂木一之「分業論と『管理論』との初期的系譜—スミス、バベッジ、ユアを中心として」、『高崎経済大学論集』第18巻第4号、1976年3月、が示唆に富む。
- (7) Ch. Babbage, *On the Economy of Machinery and Manufactures*. London, 1832. 4th ed. 1835.
- (8) 吉岡昭彦「イギリス産業革命と賃労働」、高橋幸八郎編『産業革命の研究』、1965年、90頁。
- (9) 例えば『エディンバラ評論』におけるバベッジユアの書の書評者にとっても、このような問題意識は議論の共通の前提をなしている。anon., “Babbage on Machinery and Manufactures”, *Edinburgh Review*, Vol. 56, No. 112, Jan. 1833, p. 313 f.; anon., “Philosophy of Manufactures” *ibid.*, Vol. 61, No. 124, July 1835, p. 455 f.
- (10) J. T. Ward, *The Factory Movement 1830—1855*, London, 1962, p. 291.
- (11) *ibid.*, p. 144.
- (12) P. L. Simmonds, Editor's Preface to “*The Philosophy of Manufactures*”, 3rd ed. London, 1861, p. iii.
- (13) この書の詳しい目次は、橘博『工場経営と作業分析』、1970年、15頁、に訳出されている。
- (14) 戸塚秀夫『イギリス工場法成立史論——社会政策論の歴史的再構成』、1966年、252頁。
- (15) マルクス以外にも、ヴィルヘルム・シュルツに同様な用法がみられる。拙稿「W・シュルツの〈分業と生産諸力の歴史哲学〉とマルクス」、『一橋論叢』第81巻第1号、1979年1月、参照。
- (16) 内容的に見れば、ユアの書名は『機械制生産の原理』を意味する。上林貞治郎・井上清『工業の経済理論——工業経済と工業経営』、1958年、155頁、吉田文和「A・ユア『工場の哲学』と『資本論』」、『経済科学通信』1973年11月秋季号、44頁、参照。
- (17) P. Mantoux, *La Révolution industrielle au XVII<sup>e</sup> siècle*. Paris, 1959, p. 17. 徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明訳、22頁。
- (18) Ure, *The Cotton Manufacture of Great Britain, systematically investigated, and illustrated by 150 original figures*. London, 1836, Vol. I, p. viii.
- (19) Mantoux, *op. cit.*, p. 17, 前掲訳、23頁、吉岡、前掲論文、100頁、参照。
- (20) 茂木氏は、前段と後段との力点の違いを資本家的大工業の二重性という「現実の矛盾の反映」とみなすが（前掲論文、102頁）、機械体系の規定性の認識は一貫しており、論点に矛盾はない。
- (21) Marx, *Misère de la Philosophie*. Editions Sociales, Paris, 1972, p. 148 ;

- id., *Brief an Engels*, 6 März 1862, MEW Bd. 30, S. 224 ; id., *Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861—1863)*, MEGA Abt. II, Bd. 3, Teil 1, S. 273 (以下、引用の際は Ms. 61—63 と略記) ; id., K. I. S. 370.
- (22) cf. A. Ferguson, *An Essay on the History of Civil Society*. ed. by D. Forbes, Edinburgh, 1966, p. 182 f.
- (23) このように、ユアが工場とよぶものが「紡績や織布にのみ関連するもの」に限定されていて他のほとんどの産業部門が除外されており、したがって「ユア博士の本の題名は大いに人を誤解させようである」ことは、すでに同時代の書評者によって指摘され、批判されている。anon., “Philosophy of Manufactures”, op. cit., p. 454.
- (24) Ure, *The Cotton Manufacture of Great Britain*, Vol. II, p. 174 f., 287 f.
- (25) *ibid.*, p. 202 f.
- (26) anon., “Philosophy”. op. cit., p. 470.
- (27) 吉岡, 前掲論文, 80頁。
- (28) A. P. Usher, *A History of Mechanical Inventions*, Rev. ed. New York, 1954, p. 381.
- (29) 吉岡, 前掲論文, 65頁。
- (30) 堀江英一編著『イギリス工場制度の成立』, 1971年, 第4章(堀江), 201頁。
- (31) Mantoux, op. cit., p. 18. 前掲訳, 24頁。
- (32) E. J. Hobsbawm, *Industry and Empire*. The Pelican Economic History of Great Britain, Vol. 3, Penguin Books, 1969, p. 46.
- (33) 後藤邦夫「資本主義的工業化とプロレタリアート」, 『現代の理論』1972年1月号, 51頁。
- (34) 同上論文, 49頁。
- (35) A. Smith, *The Wealth of Nations*. ed. by E. Cannan, Modern Library, New York, 1937, p. 11. 大内兵衛・松川七郎訳, 岩波文庫, 第1分冊, 112頁。
- (36) 後藤氏は、「マルクスの資本主義の下での大工業への批判の見地すら、ユアにおうところが大きい」(前掲論文, 59頁)と述べているが、これは、ユアが無自覚のまま提示した社会的労働の生産力と資本の生産力との矛盾を、マルクスがまさに矛盾として認識したということであって、ユア自身に大工業への批判があるということではない。